

国際コース選抜入試合格者の皆様へ

立教大学社会学部

合格おめでとうございます。

社会学部では、みなさまの大学での学びに役立つように、社会学に広く関連する図書のリストと英語に関する学習プログラムを用意しました。

以下の2点を推奨しますので、入学前の学習にぜひ活用してください。

記

(1) 推薦図書の読書

別紙「社会学部で学ぶ人たちのための読書ガイド」で「古典から学ぶ」「入門書・概説書」「問題意識を広げ、深める」をテーマとした図書を紹介しますので、入学前から少しずつ読み進めてください。

(2) REO(Rikkyo English Online)による英語学習

REO (Rikkyo English Online) にアクセスし、学習してください。

皆さんには「4 B」以上のコースの学習を推奨します。詳しくは別紙のマニュアルを参照してください。

以上

社会学部で学ぶ人たちのための読書ガイド

立教大学社会学部

春から社会学部で学ぶみなさんに、入学前から少しずつ読み進めていってほしい本について案内をお送りします。

インターネット、ソーシャルメディア全盛の時代、みなさんも紙の書物からはつい手も意識も遠のき、わからないこと、知りたいことがあると、万事スマートフォンでの検索で済ますクセがついていたりしませんか。

また、これまでの初等・中等教育では何よりも、「自分の意見を持つこと」の重要性を強調されてきたのではないかと思います。それはもちろん大切なのですが、言うまでもなく、意見は「かけがえのない私の」だから重要なのではなく、鋭く深い内容のものであるとき重要になります。

大学での学修は高等学校までと異なり、教科書を見れば答えが書いてあるといったものではありません。先人たちの知的営み、その蓄積の上に思索を重ね、現代の状況と対峙しつつ、ささやかでも何かしら知的苦闘の跡をつけ加えること。それこそが高等教育での勉学の精髓です。そのためには一にも二にもそうした知的営み、蓄積が詰め込まれた書物と向き合うことが必要です。

上記のような趣旨から、まずはおおむね20世紀半ばくらいまでに書かれた社会学、社会科学の古典を18点選びました。古典とは昔の状況でのみ有効な古臭い内容の本では決してありません。学生諸君のコメントペーパーなどで「いまから100年も前に〇〇〇〇を考えていたのはエラい」といった、妙に上から目線の文章に遭遇することもままあります。こうしたことを書く人は自分が歴史の終着点にいて、いまの時代にいるというだけでアドバンテージを持っているかのように錯覚しているのだと思いますが、こうしたレベルの話しでしたら、2024の現在も、あと数十年後の人たちから見れば同じように見えるかもしれません。

古典とは時の経過とともに力を失ってしまうような書物ではなく、逆に一定の時間を生き延びて良きものの評価が定着した、時代が移り変わってもなお深く鋭い示唆に満ちた、その頁を繰って汲めども尽きない豊かな対話ができるような本なのです。挙げられているのはどれも歯ごたえがあるものばかりですが、ぜひ入学前のいまから1冊2冊と挑戦してみてください。大学での勉学の基盤となるのはこうした書物との対話なのですから。

2番目には、社会学、メディア学の標準的な入門書、教科書を選んでみました。まずは1冊、座右に置いて少しずつ、また興味のある箇所から読んでみるのもよいかもしれません。

最後に、「問題意識を広げ、深める」として、社会学部の扱う広大な知の領域から、主

に現代的な諸問題について説き起こしたような本を集めてみました。こちらは興味の赴くままに手に取ってみてください。新書中心に選んであるので入手しやすく、また読みやすくもあると思います。

入学が決まり、存分に自由な読書にいそしめる数カ月。願ってもないこの精神の自由時間をみなさんが最大限生かし、春には人間と社会の過去、現在、近未来への尽きぬ興味、問題意識で頭の中をいっぱいにして大学の門をくぐって来られることを楽しみにしています。

【古典から学ぶ】

1. アレクシ・ド・トクヴィル著、松本礼二訳『アメリカのデモクラシー 第一巻』岩波書店（岩波文庫）、2005 年

1831 年から翌 32 年にかけて 9 カ月間、仏ノルマンディーの貴族出身の若き法律家トクヴィルは同僚とともに、建国間もないアメリカ各地を視察して回り、産業革命ははじまっていたものの、まだ農業中心社会であった若き共和国でしかし、デモクラシーが社会の隅々まで根づいていることに目を見張る。18 世紀末の革命で国王を断頭台に送った彼の母国では共和政はなかなか根づかず、19 世紀半ばには選挙で同国初の大統領に選ばれたかつての皇帝の甥がやがて帝位に就いた。その一方で、トクヴィルはアメリカでの見聞を踏まえて、デモクラシーが多数派の専制に陥る可能性に警鐘も鳴らしている。現代まで続くデモクラシーのアポリアを考えるうえで欠かすことのできない古典である。

2. カール・マルクス、フリードリヒ・エンゲルス著、大内兵衛、向坂逸郎訳『共産党宣言』岩波書店（岩波文庫）、1971 年

本書は、1848 年、フランス 2 月革命の直前にマルクスとエンゲルスによって起草された共産主義のマニフェストである。近代ブルジョア社会は、資本を所有するブルジョアジーと賃労働に従事するプロレタリアートの二大階級に分裂しており、工業の発展とともに、少数のブルジョアジーに富が集中する一方、大多数のプロレタリアートは貧困化する。こうして、ブルジョアジーは、「自分自身の墓堀人」をつくりだし、「各人の自由な発展が万人の自由な発展の条件となるひとつの協同社会」をめざすプロレタリア革命の条件が準備される。「プロレタリアはこの革命において鉄鎖のほかに失うものは何もない」。このように説く本書がその後の社会科学と近代史に与えた影響は大きく、今日でも、社会を闘争の場とみなす「闘争理論」の古典として参照されている。

3. エミール・デュルケーム著、宮島喬訳『自殺論』中央公論新社（中公文庫）、2018 年

デュルケームは、フランス第三共和政のもとで活躍した社会学者で、社会を個人の外部にあって個人を拘束する実在物であると捉え、社会の拘束力が個人の生を支えるものと考えた。そのうえで、こうした社会の力が弱体化しているところに 19 世紀後半のヨーロッパ社

会の病理を見だし、自殺の研究をとおしてこのことを例証しようとした。彼は、ヨーロッパ各地の自殺統計から社会集団ごとの自殺率の違いに注目し、社会学的要因による社会学的説明を試みる。一見すると個人的な出来事のように見える自殺が、個人の所属する社会集団や社会の特性によって影響されているという事実を示すことによって、「社会」の実在性とその弱体化を証明しようとした本書は、社会学の教科書で必ず取りあげられる古典的名著である。

4. マックス・ヴェーバー著、大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波書店（岩波文庫）、1989 年

ヨーロッパにおいて、資本主義は、キリスト教圏、それもプロテスタントが優勢な地域で発展したという。キリスト教倫理が、近代資本主義の発達をあと押ししたと解釈するこの書は、社会学のスターティングポイントとなっただけでなく、近代化論、宗教社会学の代表的古典である。ここから、神と人間との絶対的な断絶を説く宗教思想こそが、結果として生活の合理化を生み出す、という知見へと結びついてゆく。複数の翻訳版が出ているので、読みやすいものからトライしてもらいたい。

5. ウォルター・リップマン著、掛川トミ子訳『世論 上・下』岩波書店（岩波文庫）1987 年

1922 年に刊行されたが、今日においても、アクチュアルな警告のメッセージとして読める。当時、ジャーナリストでもあった著者は、第一次世界大戦後の混乱の原因を究明するためにこの本を著したという。大衆の心理がいかに関形成されるのかを出発点として、人間と環境の基本的な関係を、イメージの概念から解いている。その後の多くのジャーナリズム及び世論の研究では、この本を出発点としていることが多い。社会学部で学ぶ諸君には、ぜひ入学前に読んでおくことを勧めたい。

6. ヴァルター・ベンヤミン著、高木久雄ほか訳『複製技術時代の芸術』晶文社（晶文社クラシックス）、1999 年

初期フランクフルト学派の論客ベンヤミンによって 1936 年に著された。以来、文化産業論やメディア論、カルチュラル・スタディーズ等に影響を与え続けている。写真や映画（「複製技術」）の登場により、芸術の価値はいかに変化したのだろう。その登場で失われたもの、もたらされたものはなにか。またファシズムは、どのように芸術を利用していたのか。そしてその利用に対抗する術とは。ナチスによる迫害を受けつつ思想を深めていった著者の姿を想像し、またその議論を現代の状況に照らし合わせながら読んでほしい。

7. アントニオ・グラムシ著、片桐薫訳『グラムシ・セレクション』平凡社（平凡社ライブラリー）、2001 年

ファシスト政権下で獄中死したイタリアの哲学者の青年期の論考や獄中書簡などを編んだ貴重な一冊である。国家に対峙するものとして市民社会をとらえ、また国家権力が統治のために日常的に使用する装置として学校、メディア、教会の機能を看破した。グラムシの生命を賭した思想的たたかいは今日なお、いわゆるヘゲモニーをめぐる考察とともに、フランス現代思想、カルチュラル・スタディーズ、いや社会科学全般に巨大な影響を及ぼし続けている。

8. エーリッヒ・フロム著、日高六郎訳『自由からの逃走』東京創元社、1952年 —

ヒトラーのナチス・ドイツの脅威が世界を覆っているさなかに発表された、歴史的な名著。近代的な「自由」の恩恵を手にしたはずの人々が、なぜナチズムの狂気に自ら賛同していったのかを考察する。最後の一文「デモクラシーは、…（中略）…生命と真理とまた個人的自我の積極的な自発的な実現としての自由に対する信念を、人々にしみこませることができるときにのみ、ニヒリズムの力に打ち勝つ」が、とても重く胸に響く。

9. マックス・ホルクハイマー、テオドール・アドルノ著、徳永恂訳『啓蒙の弁証法』岩波書店（岩波文庫）、2007年

「啓蒙」とは、特に18世紀ヨーロッパに影響をもった、人々に正しい知識を与え、合理的／理性的な考え方へと導く思想一般を指す。この思想はその後のヨーロッパにも影響力をもったが、ホルクハイマーとアドルノは、この思想がヨーロッパの理性を牽引してきたはずであるにもかかわらず、なぜナチスのような怪物的な野蛮が生まれてしまったのか考察した。理性というものが、時に理解しがたい暴力へと突き進んでしまう事態を、本書は「啓蒙の弁証法」と呼んでいる。

10. クロード・レヴィ＝ストロース著、川田順三訳『悲しき熱帯 I・II』中央公論新社（中公クラシックス）、2001年

レヴィ＝ストロースの唯一かつ最後の「フィールドワーク」の記録であるとともに、20世紀思想界の一大潮流をなした構造主義の濫觴としての記憶。「私の野蛮人」を求めて、ブラジルの熱帯を踏査したレヴィ＝ストロースは、旅の途上で出会うブラジル奥地の先住民の生活文化を調査し、知ることによって、人類の思考に内在する無意識の構造をつかみ出そうとする。若き人類学者の思索の軌跡を、旅路のディテールとともに味わおう。

11. C・ライト・ミルズ著、伊奈正人・中村好孝訳『社会学的想像力』筑摩書房（ちくま学芸文庫）、2017年

いきなり「社会」なんていう漠然としたものを相手にしなくても、私たちは（あなたも）社会学を始めることができる。本書『社会学的想像力』は、たとえば、あなたにとっての切実な生きづらさから出発して、それを、あなたが生きている時代や社会の仕組みの中に位置

づけ直して考えるための指針を与えてくれる。ミルズが宣言した社会学的想像力とは、個人の人生や経験を歴史や社会構造と結びつけて考える力のことなのである。

12. ダニエル・ブーアスティン著、星野郁美、後藤和彦訳『幻影の時代』東京創元社、1964年

私たちはメディアの情報によって、現実にはない幻の世界の出来事をあたかも本当であるかのように受け取っている——現在このようなことが、あたかもインターネットがもたらした新しい現象のように伝えられているが、今から50年以上前にテレビが社会に普及した頃、すでにこうした現象について考えていたのが、本書である。旅行ガイドの影響など、メディアの違いだけにとどまらない考察もなされているだけに、皆さんには本書から幅の広い発想を見つけていただきたい。

13. ベネディクト・アンダーソン著、白石隆・白石さや訳『定本 想像の共同体』書籍工房早山、2007年

ベネディクト・アンダーソンは、ネーションを「イメージとして心に描かれた想像の政治共同体である」と定義した。特定のネーションのなかでは、お互いを知らない多くの人々が自分と他人を結び付けて共有するイメージを形成する。このようなネーション形成の背景を明らかにした作品として注目を浴び、1987年最初の翻訳（海賊版を除く）が日本で出版された後、1990年代にヨーロッパを中心に10か国以上で刊行された。さらに2006年の改定版は、それまで以上に広く世界に普及することになった。

14. W・F・ホワイト著、奥田道大、有里典三訳『ストリート・コーナー・ソサエティ』有斐閣、2000年

1930～40年代のアメリカ、イタリア移民の集住地区とそこで生きる若者の生活や社会関係、政治家やヤクザといった外部世界と地区との接続を丹念に描いた都市社会学の古典。登場する若者たちのその後について触れたアペンディックスも必読。中産階級の著者と、イタリアにルーツを持つ若者たちとの関係、時間を経た後の両者のつながりや彼ら自身の変化が見えてくる。社会調査をする者は本書を通し自らの調査地との関わりを省察するだろう。今後、社会調査に取り組む人にも読んで欲しい一冊。

15. ポール・E. ウィリス著、熊沢誠、山田潤訳『ハマータウンの野郎ども』筑摩書房（ちくま学芸文庫）、1996年

大学で学ぶことを選んだ時点で、君たちはそれを選ばなかった人とは別の暮らしを選んでいる。では残りの人びとは何を望み、何を考え、今の人生を選択しているのか。自分と違う他者の存在について考えることは、社会学の重要な課題の一つだが、著者はイギリスの労働階級の少年たちの暮らしに潜入し、そこに男らしさや女らしさの神話とむすびついた一

定の合理性があることを明らかにする。現代社会を生きる「他者」の文化を記述することで、カルチュラル・スタディーズの礎を築いた名著。

16. レイチェル・カーソン著、青樹繁一訳『沈黙の春』新潮社(新潮文庫)、1974年

環境問題、公害問題の「古典」といえる本である。著者は、1950年代のアメリカでDDTに代表される殺虫剤や除草剤などの化学薬品の大量散布により鳥が姿を消し、生き物が病んでしまい、春が来ても自然が沈黙することになったのを告発している。また著者は農薬の大量使用により水や土壌や河川が汚染されるのと同じことが人間にも起きることを警告し、私たちのとるべき道として化学薬品の使用をやめ、自然の力を生かすことを強調する。

17. 横山源之助著『日本の下層社会』岩波書店(岩波文庫)、1985年

近代資本主義社会の揺籃期のさなか、1899年に刊行された本書は、都市貧民・職人・工場労働者・小作人など「下層社会」の状況を丹念なフィールドワークを通して描きだしたルポルタージュの古典である。この時期の日本社会の状況を読み取ることができるとともに、調査手法や着眼点についても学ぶべき点が多い。日本史の教科書等で書名を知っている人もいるだろうが、実際に読むとその内容の豊かさ・多彩さに驚くはずである。

18. 大塚久雄著『社会科学の方法』岩波書店(岩波新書)、1966年

社会学、経済学、法学など社会科学とよばれる学問は、自然現象を扱う自然科学とは異なり、社会のなかでさまざまなことを感じ考えながら生きている人間の日々の営みを対象としている。社会科学において、自然科学とは異なる独自の方法があるのか、あるとすればそれはどのようなものか、こうした問いに正面から向き合った社会学草創期の二人の思想家、ヴェーバーとマルクスをとりあげ、社会科学のあり方を問う。

【入門書・概説書】

1. ピーター・L. バーガー著、水野節夫、村山 研一訳『社会学への招待』筑摩書房(ちくま学芸文庫)、2017年

アメリカの社会学者が、当該学問への「招待状」として執筆した入門書である。本書では、(おそらくはこれから大学に入学する皆さんも持っている)社会学に対する一般的な誤解を解くことから議論が始まる。その後は、社会学で使用される考え方の枠組みである、近代社会・社会統制・階層構造・生活史・アイデンティティ・役割論などが紹介される。難易度はやや高いが、具体的な事例と共に、社会学に対する理解を深められる内容になっている。

2. 見田宗介著『社会学入門』岩波書店(岩波新書)、2006年

「本当に知りたいこと」を求め、越境する学問と、著者は社会学を定義する。人はどうは生きればいいのか、しかしそう生きられない社会があるのはなぜか。それらの問題をあらゆ

る手段で問うのが、社会学というのである。そうした社会学を目指して行われる、愛や環境、格差、テロリズム、そして「交響するコミュニケーション」の連合という理想をめぐる知的冒険を、専門的な学習に入る前/後にぜひ一度、体験してほしい。

3. アンソニー・ギデンズ著、松尾精文ら訳『社会学 第5版』而立書房、2009年

現代を代表するイギリスの社会学者 A. ギデンズによるテキスト。日本語訳にして 950 ページ以上という分厚さだが、現代の社会学が扱う多様な対象・分野を網羅して、関連する理論、研究動向、論点を分かりやすく示してくれている。通読して社会学の多様な研究対象や考え方に親しむのも良い。また、自分が関心を持つトピックやニュースで扱われた社会問題について、社会学がどう論じているのか調べてみる、といった事典のような使い方もできる。気軽に手に取ってみよう。

4. 長谷川公一、浜日出夫、藤村正之、町村敬志著『社会学 新版』有斐閣、2019年

社会学は、社会に対する気づき（新たな認識や視点）を与えてくれるスリリングな学問である。だがその概説書となると、「概説」しようとするあまりにそのスリリングさが死んでしまいがちになる。しかし本書は、概説書でありながら、私たちが現に生きている「いま・ここ」の社会に対する認識や視点をスリリングに提供してくれる。社会学が現代社会にどう切り込んでいけるのかを、その面白味を垣間見ながら概観するには打ってつけの一冊である。

5. ケン・プラマー著・赤川学監訳『21世紀を生きるための社会学の教科書』筑摩書房(ちくま学芸文庫)、2021年

一見すると取るに足らない瑣末ものから社会全体を覆う構造まで、社会学が対象とすることがらは極めて幅広い。本書はこうした社会学の対象を「社会的なるもの」と呼び、これを捉えるための社会学の多彩な理論・視点・方法を読みやすい語りで説明する。現代の社会学の広がり面白さが堪能できる入門書である。

6. 佐藤卓己著『現代メディア史 新版』岩波書店、2018年

今日、われわれが「メディア」として考える、出版、新聞、ラジオ、映画、テレビ、それにインターネットは、19世紀以降、順に登場し、急速に発展してきた。本書は、そうした「メディア」の発達を、アメリカ、イギリス、ドイツ、それに日本をとりあげ、各国の国民国家形成の歴史に位置づけながら、わかりやすく説明する。「メディア」の歴史を通して、現代社会の成り立ちを理解するための好著である。

【問題意識を広げ、深める】

1. 見田宗介著『まなざしの地獄—尽きなく生きることの社会学』河出書房新社、2008年

1960 年代の東京。極貧の環境に育ち、集団就職で上京し、連続射殺犯となった少年がいた。彼を通して社会と人間のあり方に迫る。本書で描かれている貧困、若者、犯罪、「つながり」「まなざし」といった諸問題は今日ふたたび問われている。本書の鋭い指摘は、今日の状況にどう重なるのだろうか。解説も手がかりにして、考えてみてほしい。

2. 岡原正幸編『感情を生きる—パフォーマティブ社会学へ』 慶應義塾大学出版会、2014 年

「社会学すること」が「生きること」にどうつながるのか。社会学の「あたりまえを疑う」ものの見方は、私たち一人ひとりの「生き方」「生きる力」にどうつながっていくのだろうか。4 人の著者が、みずからの生の経験・感情経験を俎上に載せながら説く。著者自身が社会学とどう向きあってきたか／いるのかを織り込みながら、社会学徒という自己を問い、みずからのフィールド経験から他者理解とはなにかを思索している。なんのために社会学するのか、みずからの人生における社会学の意味を考えたい人にお勧めの一冊。

3. 広田照幸著『日本人のしつけは衰退したか—「教育する家族」のゆくえ』講談社（講談社現代新書）、1999 年

著者は戦前から 1990 年代までの日本の家庭におけるしつけのありようをどのようにとらえているのか。戦前、高度経済成長期、1970 年代後半～1990 年代という 3 つの時期に分けて各時代におけるしつけの特徴を整理してみよう。2000 年代以降の日本の家族のしつけの特徴とはどのようなものなのだろうか。上でまとめた 3 つの時代ごとの特徴と比較しつつ、統計資料や新聞記事などを手がかりにしながら考えてみよう。

4. 筒井淳也著『仕事と家族—日本はなぜ働きづらく、産みにくいのか』中央公論新社（中公新書）、2015 年

副題にあるように、「日本はなぜ働きづらく、産みにくいのか」について、今、ここという時代や場所から視野を広げ、歴史的な視点と国際比較の観点から検討していく。統計資料とそれにもとづくわかりやすい考察により、少子高齢化という日本社会の「症状」が深いレベルでの構造的な特性によってもたらされていることが明らかにされる。格差や社会福祉の問題に関心がある人にもお勧めの一冊。

5. 吉野源三郎著『君たちはどう生きるか』岩波書店（岩波文庫）、1982 年

盧溝橋事件の起こった 1937 年に出版された本書は、中学生の主人公コペル君の成長を叔父さんが見守り、折に触れて主人公に語りかけるかたちをとって、暗転する時代に少年たちがどのように生きるべきかを問うている。この本は、平易に書かれてはいるものの、社会学と社会科学の根本問題をあつかっており、時代を超え、世代を超えて読み継がれてきた。すでに読んだことのある人は、もう一度、成長した目で読み直すと新しい発見があるだろう。

し、まだ読んだことがないという人は、大学進学前に是非とも目を通しておいて欲しい一冊である。

6. 川北稔著『砂糖の世界史』岩波書店（岩波ジュニア選書）、1996 年

この本は、世界中に広まり好まれてきた砂糖という商品を取り上げ、その生産・流通・消費と、それらの過程が結ぶグローバルなネットワークを描いている。本書に出てくる、カリブ海地域の奴隷制プランテーションでつくられた砂糖をイギリス工業都市の労働者が紅茶に入れて消費するという構図は、発展途上国からの輸入食品や工業製品を享受している現代日本の私たちにも通じるものがある。本書を読み、私たちの身の回りのモノがどこで、誰によって、どのようにつくられ、届けられているのかということに思いを巡らせて欲しい。

7. エリック・シュローサー著『ファストフードが世界を食いつくす』草思社（草思社文庫）、2013 年

ハンバーガーやフライドチキン、いまや全世界を席卷するファストフードの背後には、巨大化した食品メーカーや農畜産業の利益優先の不合理がはびこっている。化学薬品、香料まみれのハンバーガーの味を刷り込まれる子どもたち、専属契約で廃業に追い込まれる農地や牧場、そして労働者の搾取。ファストフード産業は地球環境と人々の健康を害し、自営農民や労働者、そして文化の多様性を破壊している。わずか半世紀で荒廃したアメリカ人の食と農業構造を緻密な取材と圧倒的筆力で描いた衝撃の書。最新状況をふまえた追記も掲載。

8. 三田知実著『グローバル化するアパレル産業と都市：裏原宿・表参道の都市社会学』花伝社、2022 年

時代を反映するブティックやブランドショップが集積する裏原宿・表参道エリア。このエリアはグローバリゼーションの波のなかで大きく変容したアパレル産業が集積する一方、ローカルな地域社会もまた変化の波にさらされている。変化していく街とここに関わる人々の姿を 20 年にわたるフィールドワークから描き出した本書からは、ローカルとグローバルが交錯する場としての都市の姿が見えてくる。

9. 小川さやか著『「その日暮らし」の人類学—もう一つの資本主義経済』光文社（光文社新書）、2016 年

タンザニアの零細商人の生き方を同国の都市から東アフリカ近隣国、そして香港・中国本土と様々なスケールで豊かに描きだした本。著者は、人々の職探しや新規商売の開拓、国境を越えた中国商人との取引や海賊版消費の背後にある論理を明らかにする。そこで崩されるのは、「未来のために今を犠牲にする」時間感覚、「誰かに依存せず自立する」ことが前提の人間関係、「合法性／違法性」の境界といったことに関する価値観の自明性である。常に

将来に備え続けてきたであろう、本学の入学生にも薦める。

10. 小池靖著『セラピー文化の社会学』勁草書房、2007年

カウンセリング的なものの見方、態度が現代社会において広まっている理由は何だろうか。著者は、販売員組織、ビジネスセミナー、依存症の自助グループなどを題材に、その実態を分析している。自己の内面を見つめなおし、前向きな人生観をもって、自己実現してゆこうとする態度が、現代社会では優勢である。それは現代人にとって、ひとつの世界観となっていると著者は論じている。

11. 長谷川公一著『脱原子力社会へ』岩波書店（岩波新書）、2011年

スリーマイル、チェルノブイリ。深刻な事故を経験し、90年代から日本やフランスを除く先進国ではエネルギーの「非原子力化」が進んできた。グリーンな電力、省エネ、アメリカやドイツを例に、脱原子力社会への転換を考える。

12. 関礼子・廣本由香編『鳥栖のつむぎ—もうひとつの震災ユートピア』新泉社、2014年

福島県から、関東から、福島原発事故で避難したお母さんたちが、佐賀県鳥栖市で出会った。迷いと葛藤を抱えながら、人と繋がり、支え合い、助け合い、それぞれの道を歩んでいく＜避難とその後＞の物語。

13. 橋元良明『メディアと日本人—変わりゆく日常』岩波書店（岩波新書）、2011年

本書は、日本社会におけるメディア利用の変化を具体的なデータに基づいて説明したものである。あなた自身のメディアの利用の仕方と比較しながら、現代の日本社会におけるメディアのあり方を考えてみよう。

14. 澤康臣『グローバルジャーナリズム』岩波書店（岩波新書）、2017年

世界を揺るがせたパナマ文書報道の裏側を追った克明なりポート。筆者自身も共同通信特別報道部記者として同プロジェクトに参加、いわば内部からの報告である。スクープ競争にしのぎを削るジャーナリストたちがデジタル情報技術を駆使しつつ地球規模で連帯して巨悪を暴く姿は、新時代の国際ジャーナリズムの可能性を感じさせる。

15. 原寿雄『ジャーナリズムの可能性』岩波書店（岩波新書）、2009年

著者は権力監視というジャーナリズムの根幹をなす役割を論じたうえ、昨今のメディア現象と政治問題を鋭く批判し、問題提起している。主に報道人と政界の距離問題、表現の自由と個人情報保護法などの法規制、世論とジャーナリズムの主体性と倫理を考察し、インターネット時代における調査報道の重視こそジャーナリズムの再生と発展の可能性につながる

ると締めくくっている。

16. 多木浩二『スポーツを考える―身体・資本・ナショナリズム』筑摩書房（ちくま新書）、1995 年

スポーツが好きで、ぜひ卒論はスポーツについて書くことを希望する社会学部生は多いが、スポーツに感動を求めるあまり、研究の対象として捉えることに失敗するケースが多い。本書は、スポーツ史概論でもあり、スポーツを社会学的な視点から研究するための入門書でもある。またメディア分析の必要性も提起している。スポーツを知的探求の対象にしてみたい人には、ぜひ一読を勧めたい。

17. 岩渕功一『トランスナショナルジャパン―ポピュラー文化がアジアをひらく』岩波書店（岩波現代文庫）、2016 年

1990 年代に盛んになった日本発ポピュラーカルチャーの国境を超えた受容に注目した先駆的研究。それ以降、メディア文化の国境を超える流れはさらに広がり、日本を含む東アジア地域においても、音楽、ドラマ、映画、マンガなどのポピュラーカルチャーの相互浸透は日常的な風景となった。その一方で、この地域では、依然として歴史的・政治的な葛藤は絶えず、内向きのナショナリズムが強くなり、排外主義が勃興する現実すらある。グローバル化時代における「文化と政治」を考えるための入門書として推薦する。

18. 渡辺裕『聴衆の誕生―ポスト・モダン時代の音楽文化』中央公論新社（中公文庫）、2012 年

クラシック音楽は「なんだか」高尚、ベートーヴェンは「なんだか」厳めしい……、私たちが日頃漠然と抱いているそうしたイメージは、しかし決していつの時代にも通用する普遍真理ではない。社会が変わることで、音楽を巡る常識やその受容スタイルも驚くほど変わっていく。では、現代（ポスト・モダン）に特有の音楽に対する姿勢とは？ 親しみやすい文体で「社会」という観点から音楽を考えるためのきっかけを与えてくれる名著。

19. イーライ・パリサー著、井口耕二訳『フィルターバブル―インターネットが隠していること』早川書房（ハヤカワ文庫 NF）、2016 年

「フィルターバブル」とは、Google や Facebook などが、ユーザーに対してパーソナリ化のフィルターにかけて情報を提供し続けることで、ユーザーが自分に興味あるものだけに囲まれて、それら以外の情報から遮断された皮膜（バブル）の中に閉じ込められることを指す。パリサーはこれをプロパガンダや情報操作以上に強力なものだと考えている。原著は 2011 年に書かれたものだが、2016 年の米トランプ大統領の誕生の出来事などにも、IT 企業によってもたらされたフィルターバブルの弊害を見ることができ、いまなお Web や SNS を考える上で重要な視点を提供してくれる。

20. マニエル・カステル著、矢澤修次郎、小山花子訳『インターネットの銀河系』東信堂、2009年

本書は、情報社会学という学問分野の確立に大きく貢献した社会学者の主著であり、インターネットの普及以降誕生した「ネットワーク社会」を多角的に理解するために、網羅的な視点がバランスよく提供されている基本文献となっている。ネットワーク社会が、社会学の基本概念に基づいた社会理解とは異なる視点（例えばテクノロジーとしてのインターネットの複合的な歴史）から検討されながらも、社会学のスタンダードに則って議論が展開されている。